公開研究会 淀川水系治水における大戸川ダムと琵琶湖の役割の検証
2023年5月13日 13:30-16:45 龍谷大学瀬田学舎1号館619室（オンライン併用）

討論（前半の部）

参議院議員・前滋賀県知事　嘉田 由紀子
滋賀県立大学 名誉教授　　秋山 道雄
（発言順）

嘉田：自然界の仕組みからすると不条理なことも、政治の力でいくらでも曲げられる。それを私は目の当たりにしてきて。それで、淀川水系流域委員会の委員から知事になって、そして今は国会でというところで。その話が、今回のこういう皆さんにも、本当に確実に歴史と自然の仕組みを、できるだけ真実に近い形でたどりながら社会の流れを変えていこうという思いと、本当にすごいギャップがある。そのことが、今日もしみじみと感じたなと思っております。

中川さんのこのfictiousな治水の構想の論文で、三日月委員会がいかにいい加減だったかということを述べられた。私も今もそう思う。ジリジリ思いながら、たった3回の勉強会で。しかも、いかにもそれが京都府だったら3兆円、大阪府だったら9兆円も洪水被害が出るんだと。まさに大戸川ダムを作ることで、まさにこんなficitiousなことがまかり通って。それで、国土交通省は待ってましたとばかりに。これを、斎藤幸平さんが惨事便乗型公共事業と呼んだ。つまり、火事場泥棒です。今日の私の資料の最後にもそれを入れたんですけど。中川さんにも改めてこの問題を提起していただいたことは、私は政治家として大変うれしいと思っております。

ですから、この大戸川ダムの問題、それからもう一つ、琵琶湖の問題。そうなんです、琵琶湖は溢れる湖なんです。だから、コイ科の魚類は何万年も進化をしてきて、洪水と一緒に葭帯や田んぼに入って産卵してきたわけですよ。そして秋の台風で湖が溢れたら、アユやビワマスは秋に産卵にはいる。だから、生き物は溢れる湖に対応してきたのに。残念ながら、明治以降の治水・利水の、しかも琵琶湖総合開発というのは。これいつも琵琶湖総合開発は琵琶湖の多目的ダム化ですと、ずっと言ってたんですけど。溢れる湖を無理に湖岸堤で150㎝の水位で囲おうと言っている。

ここ、先ほど西野さんの話もそうですけれども、私たちはやっぱりもっと自由に溢れさせてあげようよ。そしたら、コイやフナのお母さんが喜ぶよと。昨日も静岡でその話したんです。コイやフナのお母さんの気持ちになろうよということを言ったんですけど。そのあたりのところも含めて、これから溢れる湖としての琵琶湖と付き合い方というのも、新しい秋山さんが言われたような社会意識の中に反映していける時代かな。

秋山：中川さんが瀬田川洗堰の操作は上下流の対立に関係ないんだという話で、いわば洪水があっても瀬田川の洗堰は全開しても構わないという話になるわけです。今、瀬田川洗堰は全開で800トンですが、800トンを流した時はこっちの大戸川から来る水と合流する

地点で大戸川の水が留まってしまって、それが大戸川の水位の上昇につながっていくというのがありますね。

それから、瀬田川洗堰は、琵琶湖沿岸は上下流の対立の点にはならないんだけれども、瀬田川と大戸川のコンペティティブな関係にするような潜在的な存在になっているということがあって、ただそれが大戸川の上流につながるというのではなくて、大戸川の領域についてはもちろん、内水氾濫が大きいでしょうから問題はないわけですけども、その辺りを、中川さんが提起された論点の延長にあるかな、というようなことを補足して話しておきたいと考える次第です。